



継母強奪

私は義息に奪われた

屋形宗慶

挿絵 / asagiri

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



| | | |
|-----|-------------|-----|
| 序章 | 紫煙の悪夢 | 4 |
| 第一章 | 強奪の夜 | 13 |
| 第二章 | 良妻の陥落 | 75 |
| 第三章 | 改質されゆく心身 | 111 |
| 第四章 | 征服の証明、服従の立証 | 182 |
| 第五章 | 狂い咲きの披露宴 | 220 |
| 終章 | 至福の生活 | 279 |



登場人物

Characters

兩宮 美月

(あめみや みづき)

年上の夫の後妻として結婚した新妻。三十一歳。若い頃はグラビアモデルをしていたが現在は引退。当時からアルバイトしていたコンビニエンスストアの店長、真と結婚したばかり。

兩宮 紘人

(あめみや ひろと)

真の前妻との息子にあたる少年。一見、明るく人懐こい性格。しかし、かつて母が浮気相手と蒸発した過去により、女性不信に陥っている。

兩宮 真

(あめみや まこと)

美月と再婚した、コンビニエンスストアのオーナー兼店長の中年男性。仕事に真面目すぎるため、あまり家庭に目が届かず、前妻には浮気相手と逃げられている。

目を細めて目笑する絃人に、美月は平静を装ってみせる。

「ジッパ―、上がってないよ」

彼に指摘されるや、美月は自らの下腹部に視線を落とした。

ウエストのボタンは留められていたが、ファスナーは下りたまま。慌てていたことと、思いがけない絃人の来訪に驚いたからとはいえ、間の抜けた自分の有様に赤面する。そしてファスナーを上げようとするも、美月ははたと気づいて右手を下げた。

「そっちの隠した手は、マン汁で濡れてるんじゃないの？」

歩み寄った絃人が尻の後ろに回して隠した美月の右手を掴み、グイと引っ張り上げると、ヌラヌラと肉汁にまみれた指が蛍光灯の下に照らし出された。肉汁を纏った美月の指を、絃人は啜えて舐めあげる。

「あ、ああ、いや、舐め、ないで……」

生暖かい舌が指にまわりつき、肉汁を舐め取りながら、彼の唇が甘く指を締めつける。それはさながら、彼女が数時間前に彼にしたフェラチオを再現しているかのようだった。

(ああ、やだッ、なんで指を舐められてこんなに気持ちよく……ッ)

また股の奥がジュンと潤みを増す。子宮が縮み上がるような疼きが絶え間なく沸き

立ち、コンビニの制服の下で乳首が痛みを感じるほど硬く勃起していた。

「我慢しないでよ？ オレはオレが満足するようにするけど、逆に義母さんが満足できるようにだってしてやれるんだからね？」

絃人の口にした言葉の意味を美月が掴みかねていると、彼は掴んでいた彼女の右手を離し、自分のズボンの中から八割方勃起したペニスを引っ張り出してみせた。

（もう、勃ってる……）

無意識に飲んだ生唾が思いがけず喉を鳴らし、美月は飢えにも似た自分の欲情の度合いを知る。上げ忘れたままのファスナーの下端辺りには、潤みを通り越して漏れ出したといったような肉汁が、下着に止まらずスキニージーンズまで湿らせ始めていた。（ごめんなさい、真さん……や、やっぱり、私……やっぱり欲しいのッ……）

二時間も前、この男根をしゃぶっていた時から胸の奥にあった衝動。

もうすでに夫よりも多く女性生殖器に受け入れたであろう、艶めかしいまでの雄渾さで惑わす義息の魅力的な男性生殖器。

本心から目を背け、我慢するうちに、腹の奥底で煮詰まって凝縮された欲情。それが発情という形で噴出し、耐え難い疼きとなって美月を揺さ振り立てる。

（この疼きから解放して……ッ!!）

夫への罪悪感や、道徳を守ろうとする気持ちを上回る欲求に屈し、美月はついに行動を起こす。ファスナーが下りたまま、ウエストのボタンだけで留められているスキニージーンズを、彼女はそのボタン一つを外してするりと膝まで下ろした。

下半身は股布のぐっしりと濡れたショーツと、膝に引っかけたジーンズ。それに対して上半身は小綺麗にきっちりと身に着けた、青と白の縦縞が爽やかな印象のコンピニの制服。腰を境に上下でちぐはぐな姿は、アンバランスさというエロティシズムを醸し出していた。

「……お、お願いッ、絃人君ッ……！」

「いいけど、ここ、一応店の中だし。あいつがこっちにきたら大事おわじとになるよ？」

「だ、大丈夫ッ、ここからなら向こうの様子を見ていられるからっ」

ジーンズを膝まで下げたまま、美月は売場とバックルームを仕切る自在扉が目に入る場所に移った。

自在扉のほうからは、美月たちのいるバックルームの奥、主に倉庫としての機能を果たしている部分は柵と壁によって死角になっていてほとんどの部分が見えない。

一方、美月が柵から横に顔を出して覗くと、バックルーム内の事務所兼休憩所となっている部分の大半と、自在扉のマジックミラー窓越しに売場の一部、そしてレジま

で見通せた。

「本気で、ここでしてほしいの？」

「は、はい……お願い、早くッ……真さんが来たりしないうちに……」

ついに自ら義息を求めるといつ時に至っても、彼女は夫の存在を無視はできなかつた。それは不貞を隠すという防衛本能であると同時に、その存在を意識することでチリチリと背筋に感じる背德的な官能が、無視することを許さないからでもあった。

「そんな必死におねだりされると断れないな。わかった、義母さんがそこまでいうなら、言う通りにするよ」

その口調、その言葉。自分はあくまでも美月に誘われてそうするのだと強調しながら、絃人は美月の耳元にそう吹き込む。

自ら彼にねだり、店舗の中でふしだらな行為をするために引き込んだのだという実感が湧く。途端、美月はゾクゾクと湧き上がった震えに豊満な女体を微動させた。

美月が商品の在庫を積んだ棚に片手をかけて巨尻を突き出すと、絃人はそれを一撫でし、そして尻を包み込んだショーツを太腿の程まで脱がせる。

剥き出しになった無防備な——否、防備などと言う姿勢は微塵も見られない、受け入れ態勢万全の淫臀は、柔らかさと張りを一体とした猥褻な曲面を見せつける。

たつぷりとした肉の張り出しが生む深い尻の割れ目。その下方でむっちりと閉じ合
わさった肉唇が涎を垂らし、唾え込むべきものが訪れるのを待ち侘びていた。

絨人は人妻の尻という名の猥褻物に手を添えると、挿入に具合がいい高さに誘導し、
ペニスの先端を厚みのある肉の唇に押し当てた。

(ああ、やつと、やつとお……！)

感動にも似た気持ちが美月に湧く。自分に嘘を吐き、我慢をしてきた肉欲。それを
解放することを自らに許した美月は、この上なく晴れやかな淫楽の境地にあった。

「ちゃんと言葉でおねだりして？ 義母さんのほうから誘ってきたんだから、ね」

「は、はいッ……お願いします、私の……義母さんのオマ○コにい……絨人君のオチ
ンチン、入れてくださあい……ッ」

多少たどたどしくても、これまででに絨人に強要されて口にした言葉の中から、口に
しやすいものを見繕って彼にねだり口上を述べ連ねる。

その口上が百点満点であるといった素振りではなかったが、美月の口上を聞き届け
た絨人は、ゆっくりと腰を押し出す。

——ずぬにゆにゆにゆるる……ッ。

「ほ、ああア……っ♥」

「すごいトロットロになってるな。いい具合だよ、義母さん」
焦れに焦れた肉穴に、ついに待ち望んだものが押し入り、美月は全身が戦慄くほどの喜びに熱く吐息を漏らす。

（は、はああ、はああああ——ッ！　きたッ、キタッ、キタッ！）

胸の内でも高く張り上げる歓喜の叫び。大きな喜びは体にも表れ、膝がガクガクと笑い、美月は自らの体を支えるために強く柵にしがみついた。

「ッ！　いきなりギチギチ締めつけてきて……ッ、そんなに気持ちいい？」

美月が柵にしがみつくように、肉棒に牝穴が食らいつく。

「ンふんッ！　ンふッ！　んっふうッ！」

絃人の問いかけにはとても答えられるものではなかった。

これまでの嘘と我慢の反動か、一度自ら求めて貞操や道徳といった枷から解き放たれた開放的な快感。気を緩めれば大きく嬌声を轟かせてしまいうような口元を引き締め、活力に充ち満ちた若い牝に愛される至幸を噛み締める。

「楽しんでるところ悪いけど……あいつが来ないかちゃんと見張ってる？」

「ンひッ！　くうふッ！　ごめ、ん、なさいッ、ちゃんと、見て、ます、からあ」

それまで以上に柵に強くしがみつくながら、美月は自在扉のマジックミラー越しに

売場を見やる。そこには、レジに立ち、会計をする夫の姿があった。

（真さん……あなたのせい、なのよ？）

豊大な淫臀を義息にホールドされ、掘削よろしくペニスを打ち込まれる。一突きごとに震える尻肉や、硬い肉棒が突き上げる牝穴と子宮から弾けるように快悦が迸り、その満悦に美月は幸福感を抱く。

反面、夫でありながらこれまでこの幸福感を与えてくれなかった真に憤りを覚える。（あなたがこんなに愛してくれないから……あなたが前の奥さんに後ろ髪を引かれてなんているから……私、絃人君に付け入られたのよ……ッ！）

憤りとも責任転嫁ともつかない気持ちをマジックミラー越しの真にぶつけながら、美月は絃人に捧げた尻を揺らす。

まるで夢と現を隔てているかのような自在扉と、それに備えつけられたマジックミラーの窓。扉の向う側では、少し客の数が増え始めた様子が見て取れた。

商品の発注とレジ打ちを一人でこなす真。客が増えたこともあって手が回らなくなり始め、そこにいるはずの美月を気にかけて彼はちらちらとバックルームに視線を向け始めていた。

（絃人君は私が一番望んでいたものをくれたの。あなたが一度も私にくれなかった、

「女であることの悦び」よ……」

今も下半身から全身に満ちるほどの幸福感を得ながら、美月は夫のマジックミラー越しの視線に背徳の興奮を覚える。

「ッふ、ッく……初めて、じゃない？ 義母さん、自分からケツ振るっ、て、さっ」

絃人の突き上げに合わせて、彼女自身も豊満な不貞尻を揺する。尻の厚い肉がブルブルと震え、その振動までもが美月の快感となっていく。

「んくっ！ ンんふッ！ ああ、いやあつ、違うッ、違うのオッ、勝手にお尻っ、動いちや、うッ、のオ……っ！」

——たむッ、たむッ、たぼっ、たっばん、たばんっ、たばんっ……。

どっしりとした大きさの尻を絃人の腰に打ちつけるたびに、尻肉が波打ちながら音を立てる。無心になってひたすら淫快を掘り起こそうと尻を振るにつれ、より強さと速さが増していった。

膣肉が食い締めて放さない若い牡の魅力。彼と関係を持つうちに、膣内で形を覚えてしまうほど馴らされた絃人のペニス。隆々と反り返ったそれは、尻の一スイングごとに子宮口にぶむぶむと龟头を衝突させる。

（ああ、これッ、この、突かれちゃいけないところを突かれてる感じ……！ これ

を味わわされてから、私ッ、私いッ……)

ザワワワワッと子宮口から子宮、下腹部、腰、背筋と痺れにも似た至高の快悦が波及する。それは美月の脳天まで貫き、弾けた。

(アクメの味いいい……ッ!! 教え込まれちゃったのお……ッ!!)

膝が笑い、柵にしがみついた手も震える。絶頂に達した尻は病的なガクガクという痙攣を起こして、アクメ度合いの強さを露わにしていた。

「くッほあああああ……ッ!!」

身震いしながら、ジワジワと体の芯まで染み入るようなアクメの余波に美貌を呆けさせた。

揺らぐ視線がマジックミラーの向こうで焦点を合わせる。そこには、会計を終えた客に頭を下げたあと、レジカウンターを出て美月たちのいるバックルームへと歩みを運ぶ真の姿があった。

「ッ?! ま、真さんがこっちにッ……!」

「上手いこと誤魔化してよ? これからも……セックスしたいなら、ね」

天使の誘惑か、悪魔の囁きかといったように囁くと、絃人は美月の腰をホールドしたまま腰を前後動させた。



「ヒロの友達でーす、よろしくー」

冗談っぽく肩を竦めて言う絃人に、友達だという二人も冗談めかして頭を下げる。

「へえー……この人、ヒロのカーチャンなんだろ？ 完璧オレ好みだぜムチムチして

てよー、年上たまんねえーッ！」

バイクの後部に乗っていた若い男は、鼻息も荒く美月に詰め寄り、体臭を嗅ぐように鼻を寄せた。

「ああ、イイだろ？ でも、こいつはオレの女。売らないからな」

体臭を嗅ぐ男と美月との間に割り込むようにして身を寄せ、足下に転がった黒いパイプを拾い上げる。そして彼女の肩を抱き、パイプの先端で勃起著しい乳首と膨れあがった大輪の乳輪をグニグニと押しまきぐ弄った。

「えッ、マジで？ カーチャンをモノにしたのかよ？ しかも、ヒロが自分の女とか初めてだろ?!」

「使い捨てオナホみてえに女ヤリ捨ててたヒロが？ いったいどうしたんだよ？」

超常現象でも目の当たりにしたかのような驚愕の態で、男二人が目を丸くする。

同時に、美月も驚きの顔を紅潮させていた。絃人の女性遍歴を知ったことへの驚きも多少はあるが、一番の理由はそれではない。

(絢人さんの、女……？ 私が、絢人さんの女……)

美月は絢人が口にした言葉を脳裏で何度も反芻する。

女。単純なその単語に含まれた意味。性別を指すものではない、もう一つの意味を
噛み締めた。

(ああ……そうだわ、私、絢人さんの女なんだわ……)

これまでも何度も感じた幸福感。その正体を知った思いだった。

快感や官能とは別枠の悦びが、美月の子宮を疼かせる。カァッと全身が沸き立つような昂揚感と発情感。美月の中に渦巻くのは牝の性衝動。彼の女だと自覚した瞬間から、絢人に与えられる快絶を今すぐ味わいたい欲望が沸騰する。

胸の突端でニプルは痛いほど疼き、放尿の済んだ淫部からは小水ではないぬめる体液がダラリと垂れ落ち、彼女の発情をありありと表していた。

「こいつはオレ専用に躡けてるんだけど、いろいろ経験積ませてみようと思ってるんだよ。だから、オレ以外ともやらせてみようと思ってるさ」

抱き寄せた美月の豊乳を鷲掴みにして弄びながら、宝物を自慢するように艶めかしく肉付いた淫女体を友人らに見せつける。それを一方的に見せられるばかりの二人は、股間を盛り上がらせて生唾を飲み、羨望の声を上げていた。

自分より一回りも若い彼らの会話を耳にしながら、美月の女体は絃人に触れられているところから鉄が赤熱するように火照っていく。彼に抱かれない一心で、この場で自らおねだりしたい気持ちまで湧く自分に、美月は脳裏で淫らに自嘲していた。

腰に手を回されて絃人に抱き寄せられながら、彼女は店内へと連れ戻される。劣情に火照った体には、快適な温度であつたはずの店内ですら汗ばむほどの暑さを感じられた。

「友達に、オレの、自慢の女、らしいところ見せてやってよ。今まで教えてやったこといろいろあるでしょ？ ほら、最初はなにから？」

レジの前まで美月をつれてきた絃人は、いささか軟派な出で立ちの友人らの前に彼女を据えて、背後から耳元に吹き込む。

（最初……最初は……）

視線が彼らの顔から下へと滑り落ちる。そして行き着いたのは、二人の股間の膨らみ。内側から盛り上がったそれは彼らの欲求を如実に現していた。

「あの、絃人さん……？」

「うん？」

「……絃人さんの、は？」

遠慮がちに、いじらしい伏し目がちの仕草で問いかける。お伺いを立てる言葉は、遠回しな絢人への催促でもあった。

「上手くできたら、オレのもやるよ」

催促の意味を理解してだろう。絢人は美月の耳にツルツと舌を滑らせて言うど、彼女の尻を甘く抓った。やんわりと痛む快感に、美月はときめきにも似た昂揚を覚え、それに後押しされるように一歩前に進み出る。

「あの、あんまり上手じゃないかもしれないけど、いい、かしら……?」

上気した美貌をはにかませ、夫でも、情夫とも言える義息でもない、名も知らぬ少年らに媚びを売るような視線を向けながら、美月は問いかけた。

「もちろんスよ、そのために来てんスからね」

「下手でも全然オツケー！ なんなら、オレらが教えるし！」

テンション高く彼女の問いかけに答える少年らは、今にも美月に齧りつかんばかりに鼻息荒くにじり寄る。

「それじゃあ……」

美月はおもむろに彼らの前に膝をつく。顔の高さに位置した少年らの膨らんだ股間に手を差し向け、ズボンの上からそこを膨らませている正体を愛撫した。

(あ、は……私、初めて会った、名前も知らない子たちのアソコに触ってる……)

ゾワッと官能が背中に覆い被さる。見も知らぬ相手に肌を晒して、奉仕しようとしている自分の下劣なふしだらさに興奮すら覚えた。

二人の気分を盛り上げるように十分撫で回したあと、それぞれのズボンとパンツを足首まで下ろし、ペニスを引き出す。

(やっぱり、みんな個性があるのね……)

真や絃人とはまた違った男根の姿を美月はしげしげと見つめて、感触を確かめるように軽く握った。

バイクのハンドルを握っていた男のものはそれほど大きくないが、赤黒く亀頭を剥き出しにしている。片やバイクの後ろに乗っていた男のものはそれなりに大きいものの、亀頭を包皮に包み込まれていた。

色や形まで違う二本を興味深げに見比べながら、美月はそれらを手でゆるゆるとしごいて愛でる。そうするうちにペニスの先には先汁が滲み、しごく手にもぬるつきが感じられ始めた。

まったくの初対面。名前も知らない相手の男根に前触れなくしゃぶりつくのには躊躇した。しばし先汁のぬめりを広げるように手コキに興じていたが、美月はふと顔を

上げて二人の少年と視線を絡める。

「名前……教えてもらってもいい？」

「シヨージツス」

「オレはケンタ。お義母さんは、ミヅキちゃん……だっけ？」

「ええ、そう、美月。シヨージ君、ケンタ君、よろしくね」

コンビニの中でほぼ全裸という格好でペニスを弄る、淫靡かつ変態な空間で交わされる自己紹介。一瞬、正常な世界の空気が流れたのもつかの間。美月はたった今名前を知ったばかりの彼らの男根に口を寄せ、恭しい仕草で舌を伸ばし、亀頭をペロンと舐め上げた。

（絃人さんのお友達相手に私、まるで娼婦みたいね……）

——れろオ……べろっ、べろっ、れろんっれろんっれろんっ……。

唾液を塗り込めるように、ゆっくり丁寧に舌を這わせる。竿だけでなく、その下に付属した玉袋まで手でふにふにと愛でながら舌でペニス本体への奉仕を重ねた。

「上手くないとかって……上手いじゃないツスカ美月さん」

シヨージが心地よさそうに顔を緩めながら、肉棒を舐め上げる美月を称美する。剥ききつている彼の男根は美月の唾液でべっちよりと濡れ、もはや唾液と先汁の区別は

まったくつかなくなっていた。

「んふ……ありがとう、もつと頑張るわね」

不道徳な行いであつても、褒められて悪い気はしない。思わずペニスを愛でる舌の動きも軽やかになり、美月は機嫌よさそうに両手と舌を躍らせた。

「美月ちゃんオレのもしっかかり頼むよー。オレ、ホーケーだからさあ。ちゃんと剥いてくれないといまいちヨくないんだよなあ」

知らず知らず、ショージの称美に気をよくしてそちらに熱心になっていたのか。ケンタが不満を口にしながら包茎ペニスを美月に向かって突き出した。

「あつ、ごめんね。そう、か……剥くのね」

包茎を見るのも触れるのも初めてだった美月は、正直なところその取り扱いに困惑していた。しかし、ケンタの言う「剥く」という言葉にそういうものかと合点がいく。

「手で剥けばいい？」

「美月ちゃんホーケーとか初めて？ 手で剥くのもいいけどさ、口でやってみてよ。唇で皮を押さえて、根本のほうに押しやってみたいにすんの」

ケンタに教えられ、美月は頭の中でその方法をシミュレートする。こんな感じだろうという具合を頭で想像すると、美月は彼の包茎に口を寄せた。

ケンタは喉を反らせて悦よがるが、美月にしてみればそれは絃人に日頃しているただのフェラチオでしかない。

(凄い喘いでる……そんなに気持ちいいのかしら)

彼女にとつては普段と変わらない奉仕で歓ばれ、美月の優越感が刺激された。優越感をもっと悦がらせてあげたいという奉仕心を煽り、フェラ責めが過熱する。

「ッぷあ！ はンぶううッ！」

ケンタのペニスから、横に並んだショージのペニスへと跳躍するように啞え移る。

——ちゅばッちゅばッちゅばッちゅばッちゅばッちゅばッ！

啞え込むなりいきなり激しく頭を前後させ、男根にしゃぶりつく。口淫奉仕する美月の口からは涎がダラダラと垂れ、床にポタポタと落ちた。

「うっ、お……ホントすげえな美月さん、超うめえ……」

ショージも美月のがつつきフェラに喉を反らせながら、感嘆の声を上げる。

——パシャッ！ パシャッ！

その様子を眺めながら、絃人は自信ありげに、そして自慢げに片頬笑みながらカメラのシャッターを切っていた。

美月が彼らに奉仕している様は、端から見ている絃人すら興奮に引きずり込む。自



分が仕込んだフェラチオテクニクを、自分ではなく他人に施しているというのとはかたなくジェラシーを刺激する。そして同時に、義母に他人の相手をさせているという非道の行いは、否応なく黒い興奮を煽り、それとジェラシーとが合わさったよこしま邪な官能が絃人の劣情を燃え上がらせていた。

「お、お、お、やべ、もう出る……」

交互にがつがつと貪るようにフェラ責めする美月に屈し、ケンタが射精の到来を告げる。

だが美月はケンタ自身が告げるより早く、ペニスが一際硬くなりながらブクツと亀頭を膨らませたことを舌に感じて、それを悟っていた。先手を打つように、美月はケンタの爆発寸前ペニスに食らいつくと、仕上げとばかりに猛烈に首を振ってしゃぶり上げを加速させる。

「ンぶんむううッ！ らひてえっ、しえいえきっ、ろびゆるびゆるひてえッ！」

射精到来を予期したペニスに先制口撃を受け、ケンタは我慢する猶予すら与えられないことなく一気に達する羽目になった。

——びゆるるる——ッ!! びゆるるる——ッ!! びゆるっびゆるっびゆるっ!

起爆させられた射精。噴き出す精液の勢いを口内に感じながら、美月はさらに追撃

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!